

トウキ (アンジェリカ)



ビャクシ



サンシシ



中薬学概論 (一)

# 中薬の四気五味



黄懐龍



# 一、中薬学とは

中薬学は、中薬の性味、帰経、効能、応用、炮製、基原などの知識と経験に関する一つ学科である。

薬性理論は、薬物の性質、効能及び臨床での応用法則に関する理論であり、中薬の薬理でもある。

主な内容は四気五味、昇降浮沈、帰経、補瀉、有毒無毒などである。

# 中藥の薬性理論

四 気



薬性（寒・熱・温・凉）

五 味



薬能（効能効果）

昇降浮沈



薬効の方向性(病位、病勢)

帰 経



薬効範囲（臟腑経絡）

## 二、四氣五味とは

四氣五味は古人が長期にわたる臨床医療経験の中から総括した薬性理論の基本内容の一つであり、各薬物にはすべて性と味の両面が備わっており、薬物の効能は「性」、「味」と密接に関連している。

### (一) 四 氣

四氣とは、寒・熱・温・涼という異なった薬性であり、「四性」ともいう。この薬性は、薬物が人体に作用させた反応や、疾病に対する治療効果に基づいて、長期の経験から概括的に帰納された性質である。

## 薬物の寒熱性

温性薬  
熱性薬



冷えを温め、体に温熱感  
寒性の証候に効果がある

寒性薬  
涼性薬



熱を冷ます、体を冷やす  
熱性の証候に効果がある

## 寒熱証の病理特徴

### 【寒 証】

寒邪の感受、生体の陽気不足、陰気の偏盛、或は臓腑機能の低下、これらの要因によって生じる一連の症候を寒証という。

### 【熱 証】

温熱邪気の感受、生体の陰気不足、陽気の偏盛、或は情志内傷や、気鬱化火などの要因によって臓腑の機能活動が亢進するために生じる一連の症候を熱証という。

## 寒熱の弁証

	寒 証	熱 証
寒 熱	悪寒、寒がり	発熱、熱がり
顔 色	蒼白	紅潮
口 渴	なし、或は喜温飲	口渴喜冷飲
四 肢	冷え	温かく、火照る
二 便	軟便、小便清長（澄む）	大便乾燥、小便短赤（濃い）
舌 象	舌質淡、舌苔白、湿潤	舌質紅、舌苔黄、乾燥
脈 象	遅脈	数脈
精 神	精神不振衰弱	煩躁不安（怒りっぽい、精神興奮）

「素問・至真要大論」には「寒はこれを熱し、熱はこれを寒す」また、「神農本草經」に「寒は熱薬をもってし、熱は寒薬をもって癒す」とあり、疾病治療の方法と用薬の原則が示している。

臨床では、薬物の寒、熱、温、涼の四気を把握すると、臨床の処方用薬に大変役に立つ。



# 中薬四気の薬性

薬性	働き	効能	生薬(例)	方剂(例)
寒性	体を冷やし熱をさます 鎮静作用のほか抗炎症作用がある	清熱瀉火、解毒、涼血、養陰、鎮静 (解熱、抗炎症、止血安定、瀉下)	金銀花、連翹、石膏、黄連、黄芩、黄柏、大黄、桑白皮、薄荷、竜胆草	黄連解毒湯、麻杏甘石湯、五虎湯、龍胆瀉肝湯、三黄瀉心湯、大柴胡湯、桃核承気湯
涼性				
熱性	冷えを温め、新陳代謝を盛んにする作用	散寒温経 温陽益気	麻黄、附子、桂皮、乾姜、良姜、細辛、呉茱萸、当归	葛根湯、桂枝湯、麻黄附子細辛湯、小青竜湯、真武湯、八味地黄丸料 補中益気湯 十全大補湯 呉茱萸湯
温性				

## (二) 五 味

五味とは、酸、苦、甘、辛、鹹という五つの薬味である。薬性と同じように、主に薬物が人体に作用する反応や、疾病に対する治療効果に基づいて、長期の経験から概括的に帰納された性質である。

基本的には味覚によって、判断できるが、実際の味と符合しないものも存在する。

「素問・至真要大論」に「辛は散じ、酸は収め、甘は緩め、苦は堅し、鹹は軟ず」と五味の作用を帰納しているように、古人は長期にわたる薬物の使用経験から味の異なる薬物は異なった治療効果を持つことを知り、五味の用薬理論を次第に完成させた。

現在のところ、五味については以下のように考えられている。

# 中薬の五味と効能

薬味	働き	効能	臨床応用 (例)
辛 味 (肺)	散、行	発汗、 行気	麻黄は発汗に;木香は行気に;川芎は活血に働く。
甘 味 (脾)	補、和、緩	滋補、 和中、 緩急	人参は補気に;当帰は補血に;甘草は和中、緩急止痛、緩和薬性、緩解毒性に働く。
酸 味 (肝)	収斂、 固澁	止汗、 止瀉 澁精	五味子は収斂止汗に、五倍子は澁腸止瀉に、山茱萸は澁精縮尿に働く。
苦 味 (心)	泄 (降、 瀉)、燥 堅	清熱、瀉 火、瀉下、 燥湿、 降逆	黄連は清熱瀉火に、大黄は瀉下通腸に、蒼朮は燥湿健脾に働く。
鹹 味 (腎)	下、軟	軟堅、 散結、 瀉下	芒硝は軟堅瀉下に、牡蠣は軟堅散結、消瘰痰核に働く。
淡 味	滲、利	滲利水湿、 通利小便	茯苓、沢瀉、猪苓などは淡滲利水に働く。

### (三) 四氣五味の臨床意義

各薬物はそれぞれ気（性）と味を持つ、性味がほぼ同じであれば類似の効能を示し、性味が異なると効能も異なる。

例えば辛温の薬物は解表散寒に、苦寒の薬物は清熱燥湿に働く。

同じ辛味であっても、辛涼の薄荷は解表に、辛寒の石膏は清熱に、辛温の砂仁は行気に、辛熱の附子は温陽に、それぞれ働く。

その外、数味を兼ねている薬物は相応に効能の範囲も広く、例えば、当帰は辛甘温で補血活血と行気散寒に、天門冬は甘苦大寒で滋陰と清火に働く。

尚、薬物はそれぞれ独特の効能を持ち、例えば、同じ辛温解表散寒に働く紫蘇と生姜ても、紫蘇は発汗の効能が強く、行気安胎の効能を備えており、生姜は発汗の力は弱く温中止嘔の効能を持つなどです。

以上のように、薬物の気味があらわす効能はかなり複雑であり、四気、五味の一般法則を熟知した上に、各薬物のもつ特殊な効能も知って、初めて臨床でうまく運用できるのです。

# 異なる薬性で薬能は違う

		
品名	<b>紅 参</b> (こうじん)	<b>西洋参</b> (せいようじん)
基原	ウコギ科 Araliaceae のオタネニンジン <i>Panax ginseng</i> C.A. MEYER の根。	ウコギ科 Araliaceae のアメリカニンジン <i>Panax quinquefolium</i> L. の根
性味	甘、微苦、微 <b>温</b>	微甘、苦、 <b>寒</b>
帰経	脾、肺	心、肺、腎
効能	益気生津	補気 <b>養陰</b> 、 <b>清火</b> 生津
応用	<ol style="list-style-type: none"><li>1、気虚による危急状態に用いる。</li><li>2、肺脾气虚に用いる。</li><li>3、津液の消耗による口渇、消渇に用いる。</li><li>4、心神不安、不眠多夢、驚悸健忘などに用いる。</li></ol>	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 陰虚火旺、咳喘痰血に用いる。</li><li>2. 津液不足による口乾舌燥に用いる。</li></ol>



# 異なる薬性で薬能は違う

		
薬名	紅花	番紅花（サフラン）
性味	辛、温	甘、寒
帰経	心、肝	心、肝
効能	活血祛瘀、通経	活血祛瘀、通経、 涼血解毒、解鬱安神
応用	1、生理痛、血滯による無月経、産後瘀阻による腹痛、癥瘕積聚、打撲損傷および関節疼痛などの証候に用いる。 2、斑疹の色が暗く、熱鬱血滯によるものに用いる。	1、紅花と同様に使用する、薬力ははるかにすぐれている。 2、温病の熱入営血の意識障害、肝鬱、心神不安などによる精神症状（うつ病、ヒステリー、不眠など）に

# 違う味の薬が薬能は異なる

	白朮	蒼朮
性 味	甘・苦、温	辛・苦、温
薬 能	健脾燥湿、益氣利水、止汗安胎	燥湿健脾、祛風湿
特 徴	甘味は補氣固表で、主に扶正に働く。健脾 → 燥湿	辛味は発汗祛風し、主に祛邪に働く。燥湿 → 健脾
適応症	虚証（補剤に）	実証（瀉剤に）
薬 効	健脾益氣の効果に優れており、止汗作用があって、脾胃虚弱の虚証に用いる。	燥湿除湿の効力が強く、発汗作用があって、湿が盛んな実証に用いる。



ご清聴ありがとうございました！